

ニュース・フレーム論の認識論的探究（3） ：社会構築主義

FUJITA, Mafumi / 藤田, 真文

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Hosei journal of sociology and social sciences / 社会志林

(巻 / Volume)

69

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

41

(発行年 / Year)

2023-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00026518>

ニュース・フレーム論の認識論的探究（3）

——社会構築主義

藤 田 真 文

1. ニュース・フレーム論と社会構築主義

1.1 本論文の目的

本論文では、ニュース・フレーム論を認識論の側面から探究する。ニュース・フレーム論の「認識論 epistemology」的探求は、ニュース・フレームが、報道された出来事のどのような要素（what）をどのような方法（how）でフレーミングしているのかを考察することを理論的目的とする。

そのために筆者は、①パラダイムとその言語哲学的基礎としての言語ゲーム、②プラグマティズム、③社会構築主義という三つの哲学的理論的知見を参照し、ニュース・フレーム論を認識論的に探究する。前々稿ではパラダイムとその言語哲学的基礎としての言語ゲーム、前稿ではプラグマティズムを取り上げた。本稿では、社会構築主義がニュース・フレーム論にどのような理論的示唆を与えるかを考察したい。

1.2 ニュース・フレーム論と社会構築主義の学説史的関連性

1.2.1 E. Goffman 「Frame Analysis」

ニュース・フレーム論においてフレーム論の先駆的研究とされる E. Goffman は、「Frame Analysis」の序章でプラグマティストの W. James と A. Schutz に言及し、James-Schutz の社会的現実 social reality 概念が自分の考察の出発点だとする。（Goffman 1974:2）。

Goffmanは、自らのフレーム概念を次のように定義している。

私は、状況の定義が、出来事——少なくとも社会的出来事——と、その出来事に対するわれわれの主観的な関わりを律する組織化の原理にしたがって作りあげられていると仮定する。フレームは、私が同定できる基本的な諸要素を意味する言葉として使用する。（Goffman 1974:10-11）

Goffman のフレーム概念に最も近いのは、本稿「2.3レリヴァンスと類型化」で検討する Schutz の知識集積における「類型」であろう（速水奈名子 2015:16-7）。Schutz は「類型」によって、新しく経験する対象、人物、特性、出来事が、以前に経験した特定の対象、人物、特性、出来事と

「類似した」ものとして把握されようとしている。ただし、Goffman では社会的相互作用によるフレームの創発に重点があるのに対し、Schutz は世代間の知識集積の「引き継ぎ」を重視し、フレームの創発についての議論にはさほど多くの分量が割かれていないように思われる（本稿2.4）。

なお、Goffman の社会的相互作用によるフレームの創発を、前稿で考察したネオプラグマティストらの「社会的相互作用による真理の確定」と対照することも可能と思われるが、筆者の理論的力量を超えているので今後の課題としたい。

1.2.2 構築主義アプローチを表明するニュース・フレーム論

すでに別稿（藤田 2011）で考察したように、近年のニュース・フレーム論では、自らの理論的基礎を社会構築（構成）主義（social constructivism または social constructionism）に置いていることを言明する研究者が目立つ¹。

Scheufele は、フレーミング・プロセス・モデルを提言した論文の中で、D.McQuail（1994）のメディア効果研究の整理を引用し、「現在の第4段階は1980年代初頭に始まったもので、『社会構築主義 social constructivism』を特徴としている。この段階でのメディアと受け手の記述は、マスメディアの強い効果と限定的な効果の両方の要素を兼ね備えている。マスメディアは社会的現実を構築することで強い影響を与えている。（中略）他方で、メディアの効果は、マスメディアと受け手の間の相互作用によって制限される。」とした（Scheufele 1999:105）。社会構築主義への依拠をもっとも早い段階で表明した W.A.Gamson は、「構築主義者 constructionist のモデルは、メディアと世論の関係を2つの相互作用するシステムの相互作用として捉え直す」とする。相互作用する2つのシステムとは、①出来事をフレーム化し、常に意味のある文脈の中で情報を提示するメディア言説のシステム、②相互作用する個人によって構成される公共圏 public である（Gamson 1988:166）。

K.S.Johnson-Cartee は、A.Schutz（1962）の「視野の相互依存性 reciprocity of perspectives」や P.L.Berger と T.Luckman（1966）の「現実の社会的構成」を引用しながら「リアリティは、コミュニケーションの社会的過程から生み出される」とする（Johnson-Cartee 2005:1）。Van Gorp は、「フレーミングの本質は社会的相互作用にある」とし、「メディアの作り手は情報源や公共の場の他のアクターと相互作用し、受け手はメディアのコンテンツと相互作用する」と、Gamson や Johnson-Cartee と同様の見解を示している（Van Gorp 2007:64）。

前稿で言及した Molotch&Lester の先駆的研究は、1980年代末以降ニュース・フレーム論が社会構築主義を取り込む10年以上前に、すでにエスノメソロジーの観点からニュースが社会的に構

¹ 以前指摘したように（藤田 2021）、論考の中には、どのような社会構築主義の業績を参照しているのか記述がなかったり、日本では社会「構成」主義に分類される先行研究に依拠したものもある。また、constructivism と constructionism が、混用されている。ここでは、区別せずニュース・フレーム研究者の主張をたどることにしたい。

築されたものであることを指摘していた（Molotch&Lester 1974:101）。Molotch と Lester は、ニュースとなる出来事は、出来事の関係者（ニュース促進者）、ニュース収集組み立て者、ニュース消費者、それぞれの実践的、目的的、創造的な活動によって生み出されるものだとしている。

2. Schutzの日常生活世界論と知識集積

2.1 日常生活世界における知識の安定と揺らぎ

A.Schutz の日常生活世界論や多元的現実論には、フレーム概念の考察に示唆するところが多々ある。パラダイム論やプラグマティズムと相通ずる点、相違点も意識しながら参照したい。Schutzにとって日常生活世界とは、「自然な世界観の間われることのない地盤」である。

日常生活世界とは、常識的態度のうちにいる十分に目覚めた通常の成人が、端的な所与として見出す現実領域のことであると理解されるべきであろう。「端的な所与」ということによつて指示されているのは、疑いのないこととして体験されているものすべて、さらなる気づきが生じるまでは問題化されることのない事態のことである。（Schütz 2003,邦訳書：44）

日常生活世界には自分と同じように意識をもった他者が存在しており、本質的に相互主観的な社会である。

さらに私は、他の人びともこの私の世界のなかに存在していること、しかも他の対象のように、別の諸対象のあいだに身体的に存在しているだけでなく、私の意識と本質的に同一の意識を付与されて存在していること、このことをも端的な所与とみなしている。それゆえ私の生活世界は、はじめから、私の私的な世界ではなく相互主観的な世界であり、その現実性の基本構造はわれわれにとって共通なのである。（Schütz 2003,邦訳書：45）

Schutz は、プラグマティストの W.James に倣って、空想物の世界、芸術の世界、夢の世界、科学的観照の世界など多々ある「多元的現実」のなかでも、日常生活世界は「至高の現実」だという（Schütz 2003,邦訳書：47-48;Schutz1962,邦訳書1985：177-80）。というのは日常生活世界が唯一、「自分たちの身体的活動によって関与しうる領域であり、そしてそれゆえに、われわれが変化または変換しうる領域であり、「われわれはわれわれの仲間とコミュニケーションができ、そしてフッサールのいう意味での『共通の了解環境』をうち立てる」ことができる世界だからである（Schutz 1962,邦訳書 1985：180）。

日常生活世界において知識が安定しているのは、生活を営んでいる間に目の前に現れてくる事象を、「すでに解釈されたものからなる枠組のうちで」解釈するからである。日常生活世界では、「原則的に、そして類型という点で、親近的な現実のうちで」事象が解釈される。日常生活世界の中の

「私は、自分がこれまでに知っていた世界はこれから後も同様にあり続けるだろうことを信頼している」(Schütz 2003,邦訳書:50)

しかしながら、日常生活世界で生活するうちに、「自分の経験をいわば新たに解釈することを要求すると同時に、一連の自明なことがらが続いていくことを中断させる」出来事に出会うことがある。

私が自らの知識集積をもとに「さらなる気づきが生じるまで」自明なこことしてやりすごしていた経験の核が、私にとって問題적인になったのである。したがって私は、いまやそれに対向しなければならない。だがそのことが意味しているのは、私の経験集積に沈澱している、「さらなる気づきが生じるまで」は十分であった地平の深みでなされた経験の核についての解釈は、もはや十分とはみなされ得なくなり、したがって私はふたたび地平を解釈しなければならないということ、これである。(Schütz 2003,邦訳書:57)

日常生活世界における知識の通常安定と安定を脅かす中断という図式は、明らかに前稿でとりあげたプラグマティズムの真理観や T.Kuhn のパラダイム論と通底している。

例えば、C.S.Peirce は、信念は「(少なくとも)たいていは意識されない習慣である。他の習慣と同様に、信念は、信念を揺るがす予期せぬ出来事に出会うまでは、完全に自己充足的である。疑念の方はこれとはまったく逆の性質を有する」(Peirce 1905 邦訳書:209)。これまで抱えてきた信念に疑念が生じたときに、疑念のある不安定な状況は居心地が悪いので、なんらかの「探究」が始まるとしていた。J.Dewey は、いままでは環境に適応できていたという感覚が中断されるショックで、探究が促されるとしていた。「中断としての感覚は、次のような問題を提出する。このショックは何を意味するか。何が起こったのか。問題は何か」(Dewey 1920 邦訳書:82)。

さらに、Schutz のいう日常生活世界における知識の安定と中断は、Kuhn の通常科学のパラダイムとパラダイム転換の関係にも似ている。「初めは予想した当たり前のことだけが、後で変則性が認められるような事情の下でも経験される。しかしさらに事情に通じると、どこかおかしいということに気づき始め、今までもどこかおかしかったのではないか、考えるようになる」(Kuhn 1970, 邦訳書:71-2)。

2.2 Schutzの「知識集積」

Schutz の日常生活世界論において、Peirce の「信念」や Kuhn のパラダイムに当たると思われるのは「知識集積」という概念である。「知識集積」とは、ある状況に対してこのように対応したという過去の経験の蓄積によって成り立っている。そして、次に会う新しい事態に対しては、その知識集積に含まれる類型性とレリヴァンス（人物や出来事への関心、または自己との関連づけ）によって対応するようになる。

生活世界的な知識集積は、経験する主観がおかれている状況と多様な仕方に関係している。それは、状況と結びついたかつての実際の諸経験の沈殿物から成り立っている。逆に実際の経験はいずれも、知識集積のなかにある類型性とレリヴァンスとに応じて体験経過と生活史のなかへと組み込まれていく。そして最終的には、いずれの状況も知識集積の助けを借りて定義され対処される。したがって知識集積は、発生的にも構造的にも機能的にも、状況ないし状況と結びついた経験に関係づけられているのである。（Schütz 2003,邦訳書：220）

Schutz によれば、個人は習慣化された安定した知識によって、自分の状況を規定して行動する。だが、習慣化された知識で対処できない事態が出てきた場合には、既存の知識を用いてどうやれば対処できるのか「思案」するようになるという。この点から、Schutz の「知識集積」は、Peirce の「信念」や Kuhn のパラダイム、ひいてはフレーム概念に非常に近いものと言えよう。

第一に、状況は習慣的知識によって、プランに規定されている関心を満たすように規定される。（中略）この種の状況のことを、ここではルーティン状況と呼ぶことにしよう。第二に、「開かれた」状況の要素のなかには、ルーティン的に規定することのできない要素も目の前に存在しているだろう。そのような「新たな」要素が状況のなかに現われてきた場合、私は「思案」しなければならない。すなわちそれらの要素を、自分の知識集積に意識的に関連づけようと試みなければならない。（中略）プランに規定されている私の関心にとっては十分ではないにしても、すでに目の前に存在している解明図式と類型化によって解釈されているのである。（中略）そうした状況のことを、ここでは「問題的状況」と呼ぶことにしよう。（Schütz 2003, 邦訳書：247-8）

さらに Schutz は、個人の知識集積の大部分は、自分の直接経験ではなく他者の経験が社会的に蓄積され、それを引き継ぐという形で個人のものとなるという。

知識の個別的な要素、すなわち主観的な知識集積における典型的な「内容」はその大部分が、個々人が解釈をとおして獲得したのではなく、社会に由来している。それらは「社会的な知識集積」から、すなわち他の人びとの経験と解釈が社会的に客体化されたその帰結から引き継がれたものなのである。（Schütz 2003,邦訳書：476）

2.3 レリヴァンスと類型化

ここで Schutz の知識集積の重要な構成要素である、「レリヴァンス」と「類型化」について、少し詳しくみておきたい。まず、Schutz のいう「レリヴァンス」とは、ある対象への「関心」、あるいは自分と対象との「関係」を意識することである。

われわれはすでに自然的態度において、「物事を公正な光のもとで」みているのかどうか、ある所与の問題に「関心」を持ち続けるべきなのか、あることがらは自分と「何らかの関係が現実にある」のかどうか、などと自問することがある。そしてそのように自問することによって、自らが自明的な主観的所与とみなしている自分自身のレリヴァンス体系を意識的に問うている。(Schütz 2003,邦訳書：364)

このレリヴァンスが問われる対象 (Schützは「主題」という) は、自分の意思とは無関係に意識することが強えられる場合もある (「賦課された」主題的レリヴァンス)。例えば、自分の部屋に入った時に、見慣れないものが置いてあることに気づくなど。あるいは、自ら何らかの行為を行おうとする時に、対象として意識されることもある (「動機づけられた」主題的レリヴァンス) (Schütz 2003,邦訳書：371-87)。

ある対象がレリヴァントな対象 (主題) として意識された時、知識集積の要素を用いて「それはいかなるものなのか」と解釈することになる (解釈的レリヴァンス)。対象は、知識集積との組み合わせが意識されないまま、ルーティン的に解釈される場合もある。一方、この対象は「このように解釈できるのだろうか」と意識的に比較されて適用される場合もある (「賦課された」解釈レリヴァンス)。実際の経験が目前に存在している類型に「うまく収まらない」時には、問題が生じてくる。この時には、能動的に問題を解釈しようとする (「動機づけられた」解釈的レリヴァンス) (Schütz 2003,邦訳書：391-410)。

次に Schütz は、知識集積における「類型」について、次のように述べている。

(親近性の形式の一つは、) ある対象、人物、特性、出来事が、以前に経験した特定の対象、人物、特性、出来事と「同一の」ものとしてではないけれども、それらと「類似した」ものとして把握され、しかも実際の状況のなかで現勢的なレリヴァンス構造がその「類似性」以上の規定を要求しない、という親近性である。それゆえこの形式の親近性は、知識集積に備わった類型性に基礎をおいている。新たな経験は、以前の経験のなかで構成された類型を用いて規定される。それゆえこの形式の親近性は、知識集積に備わった類型を用いて規定される。日々の生活の多くの状況にあっては、実際の状況に対処するにはその類型で十分なのである。(Schütz 2003,邦訳書：449-450. 括弧内は筆者)

Schütz は、「類型」の生成過程を次のように説明している。「新たなもの」を「旧知のもの」にすることによって、「問題解決」が図られる。「旧知のもの」は、知識集積の中で「すでに目前に存在していて、しかもすでに確立されている^{レリヴァント}にレリヴァントな^{レリヴァント}連関のうちにある可能な諸規定から成り立っている」。例えば、目の前の動物が、「四つ足で、しっぽを振り、吠える」ものであることが既にわかっているというように。それに対して「新たなもの」は、もともと主題のなかで意識されず注意を払われていなかったけれども、実際の状況の中で^{レリヴァント}にレリヴァントであるこ

とが明らかになった諸規定によって積極的に捉えられる。例えば、「咬む」（この人は、目の前の動物に咬まれたのかもしれない）。この「新たな」規定が規定関係のなかに入り込み、以前レリヴァントであった規定といまレリヴァントになった規定との間に意味連関が「創り出される」。このようにして、ある類型「イヌー四つ足で、しっぽを振り、吠え、咬む」が構成される。（Schütz 2003,邦訳書：452）

このような「類型」は、個人の経験によって形成される場合もあるかもしれないが、Schütz によれば、多くの類型は先行者によってすでに経験され創造された類型が言語によって伝えられたものである。

生活世界的な類型化の領域は、そのきわめて広範な部分が言語的に客体化されている。個人にとって典型的にレリヴァントなものは、その大半がすでに先行者たちにとって典型的にレリヴァントだったものであり、したがってその意味上の対応物が言語のうちに蓄積している。要するに言語は、ある社会で典型的にレリヴァントな典型的経験図式が沈澱したものと捉えることができる。（Schütz 2003,邦訳書：458）

ニュース・フレーム論との関係で言えば、Schütz の「レリヴァンス」は、ある対象に対してジャーナリストやオーディエンスがもつ「ニュース・ヴァリュー」の問題に、また「類型化」は、ニュース・フレームの性格に対して示唆を与えるものと言えよう。

2.4 Schutz における知識集積の「引き継ぎ」

それでは、個人は社会の知識集積をどのように引き継ぐのか。興味深いことに Schutz は、前稿でとりあげたネオプラグマティストの W. V. O. Quine や真理を確定を私－他者－対象の三角関係（「三角測量（triangulation）」）で説明する D. Davidson と同じように、仮定された二者関係で知識集積の「引き継ぎ」を説明している（Schütz 2003,邦訳書：514-41）。

Schutz が事例として仮定するのは、A が川を渡る／水の入った鍋の温度を知るという2つのケースである。第一段階では、川の浅瀬の場所を知っている B の渡り方を見て A は渡り方を学ぶ。鍋に指をいれた B が苦痛に顔を歪めて指を引き抜くことを A が目にするので、鍋の水が熱いことを学ぶ。これを Schutz は、「主観的な知識習得の連続的な『客体化』」に関わる段階とする。浅瀬を渡って川を渡る／鍋に指をいれ苦痛に顔を歪めて指を引き抜くという B の行為が B の知識習得の「客体化」である。A は、B の「客体化」を直接観察して知識を得ることになる。

第二段階では、A は B の知識習得の過程を直接観察しない。A は、A が渡河しているときに B が対岸から激しく手を振りながら別の地点を指さしているのを見る。A は、苦痛に歪んだ表情で水の入った鍋の脇に立って指に息を吹きかけている B を見る。B の指差しや苦痛に歪んだ表情は、「知識習得のもともとの状況からすでに大幅に切り離されている」知識習得の帰結を客体化した「指標」である。このような指標によって、知識は伝達される。第三段階は、「日常的な生活世界に

おける直接的な経験の諸層から大幅に切り離されている場合であっても、記号体系を介して伝達される知識である。例えば、Bが川の浅瀬の地図体系を描きAに伝えるなどが考えられる。

Schutzは、このようにBからAに知識集積が引き継がれる場合について、いくつかの条件をあげている。第一に、「そこでは、主観的レリヴァンスがAとBのあいだで問題状況に応じて大なり小なり相応していること」が前提されている。つまり、AとBは「浅瀬を知る」「鍋の水の温度を知る」というレリヴァンスを共有している（Schütz 2003,邦訳書：516-7）。だからこそ、Aは浅瀬の場所や水の温度をBから学習するのである。第二に、AとBが同一の言語を話したり、第三段階の事例にあった地図体系の読み方を知っているからこそ、AはBから問題の設定も解決も引き継ぐことができる。Schutzに特徴的なのは、このような引き継ぎが行われることを「常態」と見ている点である。Schutzは、異なる部族出身者の一人の男性と一人の女性がある島に漂着したという事例をあげ、その場合でも相互主観的な共通の経験などの「客体化」によって、「彼らのあいだに共通の言語が構築される」とする（Schütz 2003,邦訳書：542）。この点は同じ二者関係を前提にしても、「共訳不可能性」を出発点にするQuineとは対照的である。

BからAへの知識集積の「引き継ぎ」は、直接観察から始まり「直接的な経験の諸層から大幅に切り離され」た記号体系による伝達へと展開した。さらに、他のCやDに知識集積が記号体系によって伝達されるようになると、その知識集積はBの主観を離れて「匿名化」する。これにより知識集積は、社会的なものとなる。

主観的な知識は、匿名的な記号体系へと移し替えられることによって、それ自体が匿名化される。（中略）さらにその知識要素はAからC, Dへと、伝達される知識要素の客観的な意味が本質的に変化することなく伝えられることが可能である。ただしその場合には、その知識要素の主観的な起源はCやDにとって完全に匿名的になるだろう。（Schütz 2003,邦訳書：546）

2.5 Schutzの「二次的構成」と方法論的示唆

それではSchutzは、以上のような日常生活世界の知識をどのように研究対象にすることができるかと考えていたのだろうか。Schutzの方法論的な提起をみてみたい。

Schutzは、社会科学の研究対象は自然科学とはまったく異なっているとする。

「(社会的世界で生活する人びとは) 日常生活の^{リアリティ}現実についての一連の常識的な構成概念によって、社会学者に先立ってあらかじめ選定し、解釈している。（中略）したがって、社会学者が用いる構成概念は、いわば二次的な構成概念である。すなわちそれは、社会的な場面にいる諸々の行為者が構成した構成概念についての構成概念である。社会学者が、自らの携わる科学の手続き上の諸規準に従って観察し、説明しようとするのは、そうした行為者の行動なのである。（Schutz 1962,邦訳書1983：52）

社会学者は、現実是这样なっていると日常生活世界で暮らす人々が構成（類型化）したうえで行動したことを、科学的な手続きの諸規準に従ってさらに構成概念化＝「二次的構成」する。この時社会学者は、観察者という立場をとる。社会学者は、観察対象となった人々の「類型的に類似した状況的背景における類型的に類似した相互行為パターンについて自らの有する知識を利用」し、行為者の動機を構成する必要がある（Schutz 1962,邦訳書1983：77）。この時社会学者は、社会的相互行為の当事者としてではなく「私心のない観察者」として、自らの認識上の関心に関わることをのみを対象としなければならない（Schutz 1962,邦訳書1983：89）。

科学はすべて、常識的な思考の思惟対象を乗り越える自らの思惟対象を構成しなければならないということを、われわれはホワイトヘッドから学んだのである。社会科学において構成される思惟対象は、独自の状況のなかで独自の個人が行なう独自の行為^{アクト}に関係しているのではない。そのモデルの内部では、科学者が考察している特定の問題に関連のある、類型化された出来事だけが生起するにすぎない。（Schutz 1962,邦訳書1983：88）

社会学者の研究対象が社会的世界に生きる人びとによって既に意味的に構成されたものであること、そして社会学者はその構成をさらに概念化する「二次的構成」を行うとの Schutz の主張を、筆者はいちおう肯定する。ただし、「科学はすべて、常識的な思考の思惟対象を乗り越える自らの思惟対象を構成しなければならない」という主張を無前提で受け入れることはできない。Schutz も認めているように、社会学者の二次的構成においてもまた「類型的に類似した相互行為パターンについて自らの有する知識を利用」して人びとの行為を理解するしかない。だとしたら、社会科学の構成は、日常生活世界における構成を「乗り越える」特権的な地位を有しているわけではなく、社会科学のあるパラダイムの中で共有されている手続きに従っているだけである。それがいかなる手続きに拠っているのか、常に明らかにされなければならない。

3. Berger と Luckmann における現実の社会的構成

Berger と Luckmann による「The Social Construction of Reality」は、著者たちも明記しているように Schutz の日常生活世界論の問題意識を受け継いだ著作である（Berger & Luckmann 1966,邦訳書：iv,293-4）。また、The Social Construction of Reality（現実の社会的構成（構築））という概念を打ち出したことで、社会構成（構築）主義の先駆的な業績となっている。ここでは、現実の社会的構成（構築）という文脈で重視すべき Berger と Luckmann の主張を概観しておきたい。

Berger と Luckmann においては、日常生活世界は「私の出現に先立って」「構成」された「秩序だった現実」として人びとの前に現れる。

私は日常生活世界の現実を秩序だった現実として理解している。そこでの諸現象はさまざま

の型、つまり私の理解から独立しているようにみえ、私の理解にたいして自らを強制してくるさまさまの型にあらかじめ秩序づけられている。日常生活の現実はずでに対象化されたものとして、つまりその場面への私の出現に先立ってすでに対象として資格づけが行われた諸対象の秩序によって構成されたものとして、あらわれる。日常生活で用いられることばはたえず私に必要な対象化された事物を提供し、秩序を設定する。そしてこの秩序のなかでのみ、これらの事物は意味をなし、日常生活は私にとって意味をもつ。(Berger&Luckmann 1966,邦訳書：32)

ここでは、日常生活世界の現実、個人の主観に先立ち独立して構成され存在していること、「ことば」が日常生活世界の対象化された事物を個人に提供することが強調されている点を確認しておきたい。そして、日常世界の現実、同じように対象化された事物を理解している他者とともに共有されている相互（間）主観的な世界である。

日常生活の現実、私にとって間主観的な世界として、つまり私が他者とともに共有する世界として、あらわれる。(中略) 私は日常生活においてたえず他者と行為し合い、意思疎通し合うことのないかぎり、存在することはできない。私はこの世界に対する私の自然的態度が他者の自然的態度に対応していること、彼らもまたこの世界が秩序づけられている対象化された事物を理解しているということ、そして彼らもまたそこでの彼らの存在の〈ここといま〉の周りにこの世界を構成しており、そのなかで活動するためのさまざまな計画をもっていること、を知っている。(Berger& Luckmann 1966 邦訳書：33-4)

さらにまた、ことばによって秩序づけられた現実の像＝象徴的世界は、あたかも通常科学のパラダイムのように普段は問われることがない。しかしながら、この象徴的世界の秩序に、揺らぎが生じる場合もある。

世界を維持するための特殊な手続きは、象徴的世界が一つの問題としてあらわれたときに必要になる。こうした問題がもちあがらないかぎり、象徴的世界は自己維持的なものとして存在する。つまり、それは当の社会のなかに客観的に存在するという事実性そのものによって、自己を正当化するわけである。(中略) 社会現象はすべて人間の活動によって歴史的につくり出された構成物であるという他ならぬこの事実からしても、いかなる社会といえどもそれが完全に自明視されるということはなく、それゆえにまた、経験的にも、象徴的世界が完全に自明視されるということはない。そこで問題は、象徴的世界が問題化するときのその程度、ということになる。(Berger& Luckmann 1966,邦訳書：160-1)

象徴的世界の自明視が困難になるケースは、特に世代間で象徴的世界を伝達する過程、あるいは

一つの社会が非常に異なった歴史をもつもう一つの社会と出会うときに現れる（Berger& Luckmann 1966,邦訳書：161-2）。このような時に象徴世界を維持するためには、神話、神学、哲学、科学などの「概念機構」が必要となる。

象徴世界を維持するための概念機構は、常に認知上の正当化図式と規範上の正当化図式の体系化を必要とする——こうした正当化図式はより素朴な形の社会のなかにすでに存在していたし、当の象徴的世界のなかに結晶化していた。換言すれば、世界維持のための正当化図式を構成する素材は、大抵の場合、いくつかの制度の正当化図式をより高度な理論的レベルでさらにいっそう精練したものから成り立っているということだ。（Berger& Luckmann 1966,邦訳書：166）

Berger と Luckmann はこの後、構成された現実が第一次・第二次社会化を通じて、どのように個人に「内面化」されるか、個人のアイデンティティの確立と関係するかに議論を進めていく。どちらかと言えば、現実が「既に構成されている」ことを前提に、その維持・継承に関心が向けられている印象がある。これは彼らの考察の出発点が、「社会的事実をモノとして考えよ」というデュルケームの主張と「認識の対象は行為の主観的意味連関である」としたウェーバーの命題を両立させることにあったことから明らかである（Berger& Luckmann 1966,邦訳書：25）。ここでは Berger と Luckmann が、わずかながらだが、秩序が「形成される過程」をどのように記述しているかを確認しておきたい。Berger と Luckmann は、まったく異なった社会世界からやってきた二人の人物 A と B を仮定する。

どのような方法によってであれ、A と B が相互関係に入れば、ただちにそこには類型化が生み出されるであろう。A は B が行動するのを眺める。彼は B の行為に動機を認め、その行為が繰り返されるのを見て、その動機を反復的なものとして類型化する。（中略）彼らの相互作用の過程において、これらの類型化は特定の行動パターンによって表現されるようになるであろう。つまり A と B はそれぞれの相手に対して役割を演じ始めるであろう。（Berger& Luckmann 1966,邦訳書：87）

Berger と Luckmann が、日常生活世界の成り立ちにおいて、すでに身につけた「類型化」による知識の蓄積を重視する点は Schutz と同様である。相互作用場面において、相手（B）が行為によって「客観化」したものを観察し、観察者（A）が B の動機を類型化しての理解（あるいは A と B のベクトルを反転して）を繰り返すことによって、秩序が形成されることになる。

4. 社会問題の社会的構築

4.1 Kitsuse と Spector 「クレイム申し立て」

J.I.Kitsuse と M.B.Spector の『社会問題の構築』を嚆矢とする社会問題に関する社会「構築」主義と、自己の社会的構成を主題にした K.Gergen らの社会「構成」主義は、互いに理論的交渉がないままにも見える。だが筆者は、社会「構築」主義では社会問題、社会「構成」主義では自己といった主要な考察対象が、人々の言説実践によって構築（構成）されることを主張している点で、両方のアプローチともニュース・フレーム論が参照すべき知見を含んでいると考えている。

Kitsuse と Spector は、社会問題を次のように定義する。

社会問題は、なんらかの想定された状態について苦情を述べ、クレイムを申し立てる個人やグループの活動であると定義される。ある状態を根絶し、改善し、あるいはそれ以外のかたちで改変する必要があると主張する活動の組織化が、社会問題の発生を条件づける。
(Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：119)

ここでは、社会問題とは、個人やグループが「苦情を述べる」「クレイムを申し立てる」という言説実践によって構築されるとしている点に注意したい。

(社会問題の) 定義を研究する手始めの方法の一つは、状態を記述し分類するのに用いられる特定の語彙^{ボキャブラリー}を調べることである。社会問題の定義は、ある状態の記述として表現され、その状態に対する態度を反映する。さらにそれは、その状態がどのように耐えがたく、問題であるとみなされているかについて、数多くのヒントを提供する。(Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：15-16 カッコ内は筆者)

クレイム申し立てでは、複数のクレイム申し立て者が社会問題の定義を争う場合もある。

複数のグループがしばしば問題の定義を左右しようと競い合う。あるグループが勝ったとき、そのグループの語彙が採用されて制度化され、対立するグループの概念は世間の目から隠されてしまう。用語が変化したとき、新しい用語が発明されたとき、あるいは既存の用語が新しい意味を与えられたとき、そうした動きは何か重要なことが社会問題の経歴または歴史に起こったことを示している。(Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：15-6)

さらに、Kitsuse と Spector は、次のようにも言う。

クレイムの申し立ては、つねに相互作用の一形式である。つまりそれは、ある活動主体から

他の者に向けての、ある想定された状態について何かをすべきだという要求である。クレイムには、それを行う者が、満足する結果を得られるかどうかはともかく、少なくとも他者に自分の主張を聞かせる権利をもつという含みがある。(Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：123-4)

つまり、社会問題を構築するクレイム申し立ては、「誰かに向けて」行われる言説実践である。さらに、そのクレイム申し立て者による宛先の選択と宛先からの拒否も社会問題構築の過程に含まれる。

第一に、クレイムは何によって成り立っており、その構成要素は何なのかということを考えてみよう。クレイムは、ある主体に対して行う要求である。それでは、クレイムの起こし手と受け手になる二つの主体は、どのようにして出会うのか。第二に、クレイムの起こし手（原告）は、どのようにして苦情の持ち込み先を決めるのか。多種多様な司法機関、官庁、そして回付（たらいまわし）ネットワークのなかからの苦情持ち込み先のそのなかの選択または、どこかへの苦情の集中の過程は、それ自体がプログラマティックであり、関心を向けられるべきものである。クレイム申し立て活動の過程で相互作用をするクレイム申し立て側とそれに応える側の存在を自明のものとし、そこから分析を始めてはいけない。(Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：129-30)

Kitsuse と Spector は、クレイムが「誰に向けられているか」という宛先について、クレイム申し立て自体では明言されていない境界的な事例にも言及している。その事例とは、ジャーナリストが地元レストランの調理場の不衛生さについて記事を書く。記事では、保健所やレストランの経営者をはっきりと批判せず、何の処置も求めていない。にもかかわらず、保健所の担当部局員や経営者が、記事に暗黙に含まれている（とそれぞれが思った）批判と要求に反応したという事例である。保健所やレストランの経営者によって、記事はクレイムと解釈されたということになる。

このような境界的な事例から、クレイムは、観察者である社会学者によって定義されるものではなく、社会のメンバーによって、日常的に定義されるものであることがわかる。メンバーが、苦情と要求を表現するにあたって慣習的な形式を使うなら、それがクレイムであるという認知と公的な認定は、ごく日常的に行われるであろう。慣習からはずれた形式を使うなら、その出来事をクレイムであると定義させるためには、かなりの努力が必要となるだろう。ときには、その意図なしで行われた出来事がクレイムとして分類され、それにみあった反応を受けることもある。また、クレイムとして意図された出来事のうちには、曖昧すぎるためにだれもその意味を理解できないものもある。(Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：127)

Kitsuse と Spector はまた、クレイム申し立てが道徳的な価値に基づいた倫理的訴えも内包して

いるとする。

クレームは、道徳的な世界の中で、要求を表現する。価値は、苦情の基礎または基盤を表す陳述である。それは、要求を正当化し、何が悪いのか、そして、なぜそれが悪いのかを説明するために使われる。価値は、動機と同じように言語的な資源であり、一連の行動の正当化のために用いられる。(Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：145)

Kitsuse と Spector による以上のような社会問題の考察は、前々稿の冒頭で言及した R.M.Entman のニュースフレームを定義と重なり合うものであることがわかる。クレーム申し立てには、①「その状態がどのように耐えがたく、問題であるとみなされているか」という問題の定義づけ、②その社会問題を生んでいる「ある状態を根絶し、改善し、あるいはそれ以外のかたちで改変する必要がある」という因果関係の解釈、③要求を正当化する倫理的評価、④クレームの宛先に対する問題解決の要求が含まれている。

さらに、クレームの申し立てが、相互作用の一形式、誰かに向けて行われる言説実践であるという点、さらにクレームの受け手自ら自分が宛先だと解釈する境界事例は、前稿で言及した社会的相互作用による真理の確定、コミットメントと資格の問題にも結びついてくる。

Kitsuse と Spector の同書では、Molotch と Lester (1974) を引用してニュースも社会問題の構築に関わっているとしており (Kitsuse&Spector 1977,邦訳書：34-5)、また社会問題の倫理的な訴えがレトリックと関わっているという興味深い指摘もある (Kitsuse&Spector 1977 邦訳書：148)。次節で触れる J.Best は、この点をさらに明確に概念化している。

4.2 Bestのレトリックとフレーム

Best は、社会問題の構築にレトリックは不可欠なものだとする。

社会問題の構築には必然的にレトリックがともなう。人がクレームを申し立てるときはつねに、他者に対して、何かの問題であり、それが特定の種類の問題であり、問題に対処するのに必要な具体的な活動は何かを説得しようと努める。これらの主張は、社会問題過程の各段階で行われる、(Best 2017,邦訳書：43)

こう述べたうえで、レトリックによる説得には、前提 (Grounds)、論拠 (Warrants)、結論 (Conclusions) という三つの基礎的な要素があるという。

社会問題のクレームにおいて、「前提」とは問題の性質に関する陳述であり、「論拠」とは行動を正当化するものであり、「結論」とはどのような行動がなされるべきかの説明となる。(Best 2017,邦訳書：49 太字は原著、以下同じ)

すべての社会問題はトラブル状態（troubling condition）を同定することから始まる。そこには二種類の言明が含まれる。そのうち、状態を記述するものが前提であり、なぜそれが問題なのかを説明するものが論拠となる。（Best 2017,邦訳書：50）

前提には、①典型例を示し、社会問題を②命名し、③統計を示すという「基礎的なレトリックのレシピ」がある。その他、追加的な前提として、「状況の悪化」「類似の問題」「関連する人びとの類型」「影響を受ける人びとの範囲」「既存の解釈に対する挑戦」などに焦点が当てられる。論拠とは、「トラブル状態に対して何かをすることを正当化し、なぜそれがなされるべきなのかを説明するものである」。「そのためクレームは、問題の状態が私たちの正義感、公正性、平等意識などの価値規範を侵害していると主張し、私たちは怒ったり悲しんだりして感情的に反応する」。結論は、「社会問題を解決するために何をすべきで、どんな行動が取られるべきかを特定する言論である」。（Best 2017,邦訳書：50-60）

Best はまた、フレーム概念にも言及している。「活動家のフレームは、絵画を縁取る額縁のように、社会運動をより大きな文脈に位置づける機能がある。これらのフレームは重要な問題を位置づけ、わかりやすい形にする。活動家のフレームは家の柱のように、構造（枠組み）を与える。それは精巧なクレームが組み立てられる枠組みのことであり」とする（Best 2017,邦訳書：86）

フレームとフレーミングは世界を特定の見方から捉えることを促す。それは、他のやり方では混乱していると見えかねないことに意味を与える。それゆえ誰かがそのフレームを採用することによって、すべてがより明確で、意味のあるものとなる。たとえば女性解放運動は、社会構造が女性を不利な立場に置く種々の方法に注目を集めさせる。フェミニズムのフレームは活動家に、世界における女性の位置を確認できる特定の視座を提供する。（Best 2017,邦訳書：86）

Best は、フレームは三つの構成要素から成り立つとする。①**診断的フレーム**（diagnostic frames）：ある問題の性質を特定する（すなわち構築主義者が「**前提**（grounds）」と呼ぶものの別名である）。②**動機付けフレーム**（motivational frames）なぜ行動が取られなければならないのかを説明する（構築主義者の**論拠**（warrants）に類似する）。③**予測的フレーム**（prognostic frames）は、する必要のあることを特定する（構築主義者の**結論**（conclusions）に類似する）（Snow & Benfold,1988；Best 2017,邦訳書：87から引用）。

Best は、クレームの申し立ては相互作用の一形式だとした Kitsuse と Spector と同じく、社会問題の構築の対話的性格を強調する。特に、クレームを向けられる側の受け手の能動性を強調する特徴がある。

重要なのは、クレイムの受け手は受動的な存在ではないことを認識することである。クレイムを耳にした人びとはそれに反応し、クレイム申し立て者はその反応を考慮に入れたうえでクレイムを修正、訂正、微修正しながら、クレイムをより効果的で説得的にしなければならない。クレイムはクレイム申し立て者／送り手から、オーディエンス／受け手に伝わる、一方向のメッセージと認識すべきではない。(中略) 別言すればクレイム申し立て者と受け手は対話(dialog)に参加しており、受け手の反応によりクレイム申し立て者はクレイムの修正を促されるのである(Nichols,2003 ; Best 2017,邦訳書 : 65より引用)。

クレイム申し立ての成功は、社会情勢がもたらす「機会構造」(＝タイミング)によって左右される場合もある。「文化的機会(cultural opportunities)は、人びとが運動のクレイムに快く耳を傾けるときに生じる(中略)。おそらく最も明確な文化的機会は、あるトラブル状態に注目し、報道する価値のある事件が発生したときである」(Best 2017,邦訳書 : 98)。例えば、2001年9月11日のテロ事件によって、テロが周辺的な関心から国民の中心的な関心事となった。「種々の問題に容易に適用できる広い見解をはっきりと述べる」マスターフレーム(master frame)が身近なものになるとき別種の文化的機会が出現する。黒人の人種平等を主張する公民権運動から「平等権」がマスターフレームとなり、女性の権利、ゲイの権利、障害者の権利、囚人の権利、高齢者の権利など他の社会運動にも波及していく(Best 2017,邦訳書 : 99)。

また、「政治的機会(political opportunities)は、異なる集団間に権力の分配が移行するときに生じ、かつては抵抗が功を奏して不可能だったはずの変化を実施に起こせるようにする。政治的機会は優先順位の変化から生じる可能性がある。そのとき、かつて無関係とされた関心が、いまや関連性を持つと再定義される」(Best 2017,邦訳書 : 100)。1960年代前半のアメリカで。旧植民地の独立によって公民権運動の勢いが増したなどの例がある。

自らのクレイムが受け入れられることに成功した活動家は、ある社会問題の所有権(ownership)を得ることができる。所有権とは、「あるクレイム申し立て者がトラブル状態に関する権威として承認される」ことを意味する。「ある劇的な出来事により、ある問題がニュース報道に持ち込まれるとき、その社会問題の所有権者は報道関係者からコメントを求められたり、政策立案者に相談されたりする」(Best 2017,邦訳書 : 104)。

Best は、メディアがクレイム申し立ての伝播に重要な役割を果たすとする。ただし、締め切りまでの時間の制約による「圧縮」、さらにはオーディエンスの興味を惹きつけ続けなければならないというメディア側の事情で、クレイム申し立て者のオリジナルのクレイムは作り変えられる(第二次クレイム)。

メディア関係者は、彼らなりの制約に直面している。メディア関係者は締め切りに追われながら仕事をするため、自分たちが報道するクレイムについて熟知する時間を持つことができない。メディアの表現は通例、圧縮されたものになる(中略)さらに受け手が読んだり見たりす

るのをやめないように、報道の内容を面白いものにしなければならない。それゆえメディアは、クレーム申し立て者のメッセージを、私たちが第二次クレーム（secondary claims）と呼ぶものへの翻訳し、変形する。第二次クレームは、第一次クレームにくらべて短く、劇的で、イデオロギーがないように作り変えられたものである。（Best 2017,邦訳書：145）

クレーム申し立て者が、メディアで報道されやすいようにクレームの伝え方を変える場合もある。「手練のクレーム申し立て者は、クレームをパッケージ化する必要を理解している。こうすることで、メディアに自分たちへの関心を持たせ、報道してもらうのである。メディアは新しく、見かけ上新鮮な素材を好む。それゆえクレームを奇抜な方法で紹介することが重要なのである」（Best 2017,邦訳書：146）。社会問題が伝播していく経路には、雑誌の誌面、テレビのトークショー、国会の小委員会が行う公聴会など、複数のアリーナがあり、各々クレームを紹介することができる収容能力が違っている（Best 2017,邦訳書：146-7）。

また Best は、「多くのニュース関係者は『双方』の見解を報道することでバランスをとる義務がある」としている。その場合メディアは、社会問題が賛成派と反対派、リベラルと保守といった二つの陣営に分かれていると単純化する傾向がある（Best 2017,邦訳書：150）。メディアは、「いかなるストーリーが関心を向けるに値するのか、いかなるストーリーがそれに値しないのか、そしてどのストーリーを無視してもよいのか」について、重要性、興味深さ、真新しさ、バランス、そして他のニュース組織の報道などから判断している。また、時にはメディアが、一次的クレーム申し立てをする場合もある（Best 2017,邦訳書：152）。

先ほど言及した社会問題の「所有権を持っている」クレーム申し立て者には、メディアは定期的にコメントを求めに向かう。それに対して、「所有権を持たないクレーム申し立て者」は、報道に値する正当性を欠いているとみなされる（Best 2017,邦訳書：159-60）。

Best は、「ランドマーク・ナラティブ（Landmark Narratives）」と呼ばれる代表的な特定事例が、その話題にかかわるニュース報道を独占することがある。「ランドマークはニュース関係者が問題の性質をいかに把握し、それをいかに報道すべきだと考えるかを教え導く」。「ランドマークはニュースの受け手が問題を理解するための言葉（term）を作り出していく」という（Best 2017,邦訳書：163）。

そのランドマークとなる事例は、パッケージと呼ばれるものに含まれていることが多い。パッケージは、「多かれ少なかれ、ある社会問題について守備一貫した見方で、その原因と解決策に関する主張を含んでいる」「中心となるアイデアやフレームを持つ」（Best 2017 邦訳書：163-4）。例えば、気候変動は人間活動がその原因であるというのは、一つのパッケージである。他方で、気候変動は人間の活動からもたらされているわけではないとの、「対抗パッケージ」（rival package）もありうる。

パッケージはまた、パッケージを想起させるランドマーク・ナラティブ、代表例、スローガン、視覚イメージなどの「凝縮シンボル」（condensing symbols）を提供する（Best 2017,邦訳書：164）。

パッケージは、社会問題のメディア報道を、大量の情報を「ストーリー」のなかに入れ込むことで、いっそう首尾一貫したものにみえるようにする (Best 2017,邦訳書: 166)。ニュースフレーム研究においても、パッケージという概念を使う論考が散見される (Gamson 1988; Van Gorp 2007) (藤田 2021:24-6参照)。Bestの指摘と対照する必要があるだろう。Bestは、社会問題クレイムは、トークショーやミステリー小説といったポピュラーカルチャーでも取り上げられ、表現されるともしている (Best 2017,邦訳書: 167)。

5. Gergen の社会構成主義

5.1 言説的世界への誘い

Gergen は、「社会構成主義の出現にとってとりわけ重要なのは、科学を生成するマイクロ社会的過程を明らかにすることである」という (Gergen 1994,邦訳書: 42)。Gergen の元々の専門領域の社会心理学を例にすれば、「ウィトゲンシュタイン流に言えば、『私は意識をもっている』という主張が、いかなる社会的機能をもつかを問う、ということである。(中略)社会構成主義が主張するのは、心理学的言説の価値は、真実を反映するところにあるのではなく、社会関係を生成するところにある、ということである」 (Gergen 1994,邦訳書: 92)。

社会構成主義は、「人が意識を持っている」という科学の言説がどのような社会関係の中で生まれ、また、それがどのような社会関係を生むかを問題にする、というわけである。Gergen は、研究やセラピーといった科学的・医学的実践もまた、文芸と同じような言説によって社会的に構成されるとする。

言葉は、人間関係の中で使用され、コミュニケーションの中で力を与えられる限りにおいて、積極的で意味のあるものとなる。だから、テキストによる現実構成について語るには、著者-読者関係が必要となる。要するに、社会による現実構成の方が基本的なのである。(中略) 文芸論的・修辞学的批判の多くの概念は、人間科学の理論的・実践的射程を豊かにしうるものである。すなわち、語り (ナラティブ)、隠喩 (メタファー)、換喩 (メトニミー)、著者の立場などの概念は、理論に関しても、様々な実践 (研究、セラピー、コミュニティへの介入など) についても、人間科学の新たな展望を切り開いてくれる。(Gergen 1994,邦訳書: 58-60)

社会構成主義は、自らが他のすべての理論よりも優れていることを示そうなどとはしない——そのための、いかなる基礎も、いかなる合理性も、いかなる方法も、提供しない。そうではなくて、社会構成主義は、何がしかの言説的世界——命題、主張、メタファー、語りなどからなる言説的世界——へ内在することをいざなうのである。つまり、社会構成主義の分析は、「選択された現実」に内在した分析であり、特定の「分析の対象」をクローズアップする。

（Gergen 1994,邦訳書：102-3）

Gergen が社会構成主義の「中心的関心は、日常社会生活にとって不可欠な暗黙自明、かつ無自覚な前提を明らかにすること——すなわち、人々が自分自身や世界にどのような思い込みをもち（記述し、理解し、指示し）、それによって互いの行為を理解可能で正当なものとしているかを明らかにすること」によって（Gergen 1994,邦訳書：177）、社会の安定化ではなく、社会の「不安定化」を研究目的とすると言っていることも、SchutzやBergerとLuckmannとの対比で注目される。

社会構成主義以外の立場は、文化の安定化を志向している。すなわち、普通、研究の目的は、研究対象の認知様式（ないし、社会的パターンの様式）を明確に構造化することにある。（中略）それとは逆に、社会構成主義の言説研究にとっては、研究目的は不安定化である。社会構成主義の言説言及の立場からすると、人々が自己や世界をいかに構成するかは社会の重要な側面である。いかなる構成がなされるかは関係性によって決まるのであるから、そうした構成のあり方を、脱文脈的な理論を検証する目的で記述しても意味はない。（Gergen 1994,邦訳書：179 太字は原著、以下同じ）

Gergen は、Garfinkel らのエスノメソドロジーや Goffman らの業績を参照しながら、社会構成主義の研究は、「社会的過程そのものに照準を合わせるものである。すなわち、いかなる過程で人々は共同的理解を達成するのか、理解の失敗はどのようにして生じるのか、いかなる状況のもので社会的構成は変化し、あるいは変化を拒むのか、複数の矛盾する社会的構成はいかに調停可能か？」を問うとする（Gergen 1994,邦訳書：183）。

5.2 言説による「事実ゲーム」

Gergen は、科学的言説とは何か特権的なものではなく、Wittgenstein（2009）によれば、『記述する』『説明する』あるいは『理論化する』という行為に携わっている時、私たちは『事実ゲーム』に参加し、特殊な文化的慣習を遂行しているのだとする（Gergen 1999,邦訳書：55）。新聞、目撃証言、科学などにおいては、どうであろう。「私たちがある記述を（『不正確』ではなく）『正確である』、『誤り』ではなく）『正しい』と考える時、その記述がどれほどうまく世界を描写しているかによって判断しているわけではありません。それは、その言葉が、あるゲームのルールの中で、『事実を告げるもの』として——あるグループの慣習に即したやり方で——機能しているということを示しているのです」という（Gergen 1999,邦訳書：56）。

Gergen は、日常生活の言葉遣いで「客観的」とはどのようなことを指しているか、次のように言う。

日常的な言葉遣いでは、客観的であるとは、思い違い、自己欺瞞的、偏見、想像、主観的

はないことである。あるいは、客観的に近い意味の言葉を並べることによって、客観性の概念について知ることもできる——実在の、正確な、まちがいのない、など。ここから明らかなことは、客観性とは、なによりもまず、個人としての人間の状態を指していることである。われわれは、普通、犬や猫に客観的であることを要求しないが、個人については騙されたり、偏見をもったり、想像にふける主体であるとみなしている。(Gergen 1994,邦訳書：221)

Gergen は、このような客観性のこだわりは、「行為の二元論と深く結びついている」という。「すなわち、個人の心理状態と、外的・物質的世界とを対比する二元論である。この二元論では、客観的な心は、外界の特徴を体系的に反映することができるとされている。すなわち、心は、外的状況の微妙な変化に正確に対応することができると考えられているのだ。客観的な人は、『物事があるがままに見』、『あるがままの現実と接触し』、『物事を正確に把握する』、というわけだ。こうした人間像は、まさに機械と呼ぶにふさわしい」(Gergen 1994,邦訳書：221)。このような Gergen の指摘は、前稿で言及した Rorty の「巨大な鏡としての心」というメタファーと相通ずる指摘である。

しかしながら Gergen は、「内界だけを頼りに、自分の心的状態が外的に対応しているかどうかなど、どうすればわかるのか?」「『自分の経験』を経験することがいかに可能か」と問う (Gergen 1994,邦訳書：223)。Gergenからすれば、それは不可能である。そうではなくて、「科学者、新聞記者、政策当局者などのコミュニティでは、個人が客観的かどうかは、言語という公共の基準によって判断される」(Gergen 1994,邦訳書：226)。

したがって、客観性が達成されるのは、普通、他者に向けられた書き言葉・話し言葉によるコミュニケーションにおいてである。すなわち、客観的であるとは、「正しい表象を表現することである——それは、テキスト的な営みである。(中略)二十世紀初頭の論理実証主義は、科学を合理的に基礎づけようとし、まさにこうした指針を提供しようとしてきた。客観的な言語は、観察可能な対象に結びついていなければならない、というものだ。すなわち、理論的記述レベルの用語は、可能な限り、誰にでも観察可能な実体や過程に対して定義されるべきである、というわけだ。かくして、客観的科学の用語リストは、世界の目録であるべきとされた。より比喩的に言えば、客観的記述とは、世界そのものの地図ないし写真である、とされたのだ。(Gergen 1994,邦訳書：226)

ここで Gergen は、客観性というものが「あるコミュニティにおける言語の基準」＝「正しい表象を表現する」テキスト的な営みであることを示すために Queneau の『文体練習』から、同じ対象の異なる記述方法を引用している (なお、ここでの引用は Queneau の原典の邦訳書による)。

一日の盛りに、白っぽい腹の巨大なカブトムシのなかに缶詰にされた回遊イワシの群のなか

で、羽をむしられたひょろ長い首の一羽の若鶏が、もの静かな一匹のイワシに向かって、突然ときの声をあげた。湿った金切り声が、空気を切り裂いてあたりに振りまかれ、やがて若鶏は真空に吸い寄せられて、すっ飛んでいった。

その同じ日、くすんだ都会の砂漠のなかで、その若鶏が何やらボタンのことで油を絞られている姿が目撃された。(Queneau1947,邦訳書：6)

このような隠喩による記述をほとんどの読者は、「客観的とは思わないだろう。現実には何がおこっているかわからないからだ」(Gergen 1994,邦訳書：227)。

S系統のバスのなか、混雑する時間。ソフト帽をかぶった二十六歳ぐらいの男、帽子にはリボンの代わりに編んだ紐を巻いている。首は引き伸ばされたようにひょろ長い。客が乗り降りする。その男は隣に立っている乗客に腹を立てる。誰かが横を通るたびに乱暴に押してくる、と言って咎める。辛辣な声を出そうとしているが、めそめそした口調。席があいたのを見て、あわてて座りに行く。

二時間後、サン＝ラザール駅前のローマ広場で、その男をまた見かける。連れの男が彼に、「きみのコートには、もうひとつボタンを付けたほうがいいな」と言っている。ボタンを付けるべき場所（襟のあいた部分）を教え、その理由を説明する。(Queneau1947,邦訳書：3)

この文体について Gergen は、「曖昧さが取り除かれ、われわれは、何が現実には起こったのかを『知り』始めている」と評価したあと、「この第二の記述において、『客観性という感覚』を強めているのは何だろうか？単に、比喩的な表現が少なく、文字通りの表現が多い、という問題だろうか」と問う (Gergen 1994,邦訳書：227)。

S系統を走る、長さ一〇メートル、幅二・一メートル、高さ三・五メートルの一台の路線バスが、四八人の乗客を乗せて、始発の停留所から三・六キロメートルの地点を通過しつつあった一二時一七分のこと、乗客の一人で、性別は男性、年齢二七歳三ヶ月と八日、身長一・七二メートル、体重六五キログラム、三五センチメートルのリボンを巻きつけた高さ一七センチメートルの帽子を頭のうえに乗せた一人物が、年齢四八歳四ヶ月と三日、身長一・六八メートル、体重七七キログラムの男に、一四語から成ることばで、五秒語りかけ（以下略）(Queneau1947,邦訳書：16)

今度は、「この記述は、一般の基準では、正確で、文字通りの言葉の使い方がなされている。しかし、この記述では、何が起っていたのかは、再び曖昧になってしまう。これでは、客観的記述の失敗である」と Gergen は評価する (Gergen 1994,邦訳書：228)。ここでは、第二の文例による「事実ゲーム」が、客観報道が要請される新聞記事の文体に最も近いことを確認しておきたい。

5.3 レトリックの産物としての客観性

Gergen は、書き言葉・話し言葉が読み手・聞き手に客観的だとみなされるのは、どのようなテキスト的な営みなのか、より詳細に検討している。ここでは主として科学的言説が取り扱われているが、そのまま「客観報道」の議論に展開できる指摘である。

(1)対象と距離をとるレトリック

客観的だとみなされるために、「必要となるレトリックが、対象記述詞 (distention devices), すなわち、指示対象と私的経験の間に距離を取るようなレトリックである。最も単純なレベルでは、特定の単語がしばしばこと役割を果たす。すなわち、「その」、「あの」(the, that, those, this)などの言葉が、一定の距離にある事象や事物に対して、行為者の注意を喚起する。「対象記述詞と対照的なのが、内面記述詞 (personalizing descriptions) である。内面記述詞は、心の中にある私的な対象に対して注意を喚起する。「私の観点」「私の意見」「…という感覚」などは、いずれも内面記述詞の例である」。(Gergen 1994,邦訳書 : 230-1)

対象記述詞と内面記述詞という二つの概念を用いるならば、客観性が脅かされるのは、対象記述詞の使用に失敗するか、内面記述詞に頼るときである。すなわち、内的なプロセスが言語領域に入り込むほど、言説の対象は主観性の領域へと遠のいていく。だからこそ、科学者は、例えば、「装置についての私の考え」ではなく「装置」、「実験室についての私の印象」ではなく「その実験室」、「質問紙についての私のイメージ」ではなく「その質問紙」、などの表現を好むのである。(Gergen 1994,邦訳書 : 231)

(2)複雑な外界の实在を強調するレトリック

テキスト的な実践が客観的だとみなされるためには、複雑な外界をどの程度詳しく記述していくかも課題となる。Gergen は、外界を詳しく記述する特徴を持つ現代の科学的著作には、具体的細部を描写する伝統と本質のみを描写するという伝統という二つの異なった伝統があるとする。前者は、「客観的に記述しようとするれば、とにかく細かく細かく記述しなければならないことになる」。他方、後者は「効率的に機能する機械は、入力を種類ごとに組織化し、刺激を原因-結果の単位に分類するはずだという観点である。この観点からすると、科学の課題は、過度で曖昧な細部記述を避け、本質的な事象についてのみ報告することである」という (Gergen 1994,邦訳書 : 232-3)。

前者については、やや極端な例であるが、先ほど引用した Queneau の第三の文例が参考になる。後者については、実験の場で発生した出来事を、「刺激」(先行条件)となる実験手続きと「反応」(帰結)の指標となりうる被験者の行為に分類して記述するなどが考えられる (Gergen 1994,邦訳書 : 233)。

(3) 経験主体と権利を確立するレトリック

テキストの客観性を確保するための第三の方法は、「**超越的視点へのシフト**」である。Gergen は、「まず、経験的主体を確立し、次に、抽象的な主体、すなわち、すべての経験的実在を平等に見わたす主体へと、視点をシフトすることが有効なのだ」。したがって、「多くの科学レポートは、抽象的な集合体の視点、すなわち、著者の視点ではなく、すべてを見下ろす「**全知者の視点**」に立って書かれていることがわかる」とする。例えば、「私は…を観察した」ではなくて「…が観察された」「私は…を見出した」ではなくて「…が見出された」という非人称代名詞を使うことで、この効果が達成される（Gergen 1994,邦訳書：235-6）。

(4) レンズのくもりをとるレトリック

第四にGergenは、「客観的報告は、自己の感情の記述を抑制する必要がある」という。例えば、「私は平均が5.00以上になることを心から望んでおり、それが実現したときには大喜びだった」などの記述は避けられ、「平均5.65になった」と記述される。また、「対象が感情を喚起する性質をもつことの記述を抑制する必要もある」とする。例えば、被験者については性別・年齢・居住地などについては触れられるが、性的魅力、容姿、性格などに言及しないなどがあげられる（Gergen 1994,邦訳書：237）。

Gergen は、このようなレトリックによる客観性を言説実践は、それを操ることができる科学技術エリートという「**特権階級を——そして、それに伴って、偏見、敵意、コンフリクトを——不当に生み出し維持するだけでなく、善や真実の文化的構成に関わる多くの意見を排除する**」とも指摘している（Gergen 1994,邦訳書：239）。これもまたそのまま「**客観報道**」を標榜するジャーナリストに対する視点に展開できるであろう。

6. Lynch 科学の言説実践のエスノメソドロロジー

M.Lynch は、「**観察**」「**表象**」「**計測**」「**証明**」「**発見**」といったトピックを「エスノメソドロロジー」と「科学社会学（Sociology of Science）」のアプローチから、再定式化しようとする（Lynch 1993,邦訳書：1）。本論文は、方法論としてエスノメソドロロジーを採用することを目的とするものでないが、Wittgenstein, Kuhn, Schutz など本論文でこれまで言及した諸業績を認識論的な基礎としている点から、Lynchの科学の言説実践のエスノメソドロロジーを概観したい。Lynch は、特に「**科学者集団**」における言説実践をエスノメソドロロジーから明らかにできるとしており、これはそのまま「**ジャーナリスト集団**」における言説実践の研究に応用可能と思われるからである。

例えば、Kuhn が取り上げた「**酸素はだれが『発見』したのか**」という科学史の事例について（Kuhn1970,邦訳書:59-64）、Lynch は次のように整理している。発見者の一人と言えるプリーストリーは、分離した可燃性の高い空気を「**普通よりもフロギストン（燃素）量の少ないあふれた空**

気」とみしていた。それに対して、ラボアジェは「大気の2つの主要成分のうちの1つを分離した」という結論をくださった。科学史的に言えばプリーストリーは燃素説というパラダイムによって実験結果を説明していたのに対し、ラボアジェは分離した気体を「純化された空気の成分」として扱った。燃素説とは別のパラダイムで「燃焼の原因を例証し、物質の科学的組成を研究するための一群の定義と説明概念がもたらされた」(Lynch 1993,邦訳書：70-1)

クーンの用語によるならば、1つのパラダイム（それは今や近代科学とより矛盾のないものに思われる）が古い世界像を置き換えたのである。クーンの議論によってウィトゲンシュタインの見解をより正確に解釈することができる。というのも、今や、ラボアジェの酸素の発見により、化学者たちが社会化されて「通常科学」の共同体の成員になり、概念枠組や一連の直示的定義や既定の実験装置や実験実践を共有するようになったと言えるからである。次の世代の化学者にとって、空気の組成と燃焼の説明は仮説ではなかった。というのは（前述のウィトゲンシュタインの引用を言い換えれば）²、「それらは彼らの研究の自明の前提であって、とりたてて言い表されることのないもの」だからである。(Lynch 1993,邦訳書：71)

ラボアジェ以降の置き換えられたパラダイムに基づいた『『通常科学』の共同体の成員』にとっては、モノの燃焼と空気の組成は論文などで説明必要なものではなく、言説化しなくてもよい自明の前提となる。

Lynch は、B.Latour と S.Woolgar のソーク研究所におけるエスノグラフィー（「Laboratory Life」）を参照し、彼らの観察では、同研究所の科学者たちが物自体を研究することはなく、記録装置に向かって働く技術者たちが作り出す「文字による銘刻（literary inscription）」をもっぱら検討していたことを記述していたとする。「科学者とカオスとの間には、記録書・ラベル・手順書・図・論文という壁だけがかった」(Latour & Woolgar,1986：128.Lynch 1993,邦訳書：110から引用)「最終結果、つまりある銘刻がいったん利用可能になると、その結果の提出を可能にするまでの段階はすべて忘れ去られてしまう。実験参加者のあいだでの議論の対象となるのは図表であり、それを産み出す物的過程は、たんに技術的なこととして忘れ去られたり当たり前のこととされる」。(Latour & Woolgar,1986：128.Lynch 1993,邦訳書：63から引用)

Latour と Woolgar の結論は、Kuhn が記述したラボアジェ以降の「通常科学」の共同体の成員の行動に相通ずる。Lynch は、このような観察結果を導き出した Latour と Woolgar の研究態度の意味を、次のようにまとめている。

（彼らは）実験室で何がおこっているかを見る虚構の「観察者」の視点から、自らのエスノグラフィーを提示する。この観察者は、実験室で理解可能だとわかったものについてだけ、つ

² ラボアジェの実験に関する Wittgenstein の言及を指す (Lynch 1993,邦訳書：70)

まり痕跡・テキスト・会話のやり取り・儀礼的活動・見慣れない装置についてだけ記述をする。
 (Lynch 1993,邦訳書：115 括弧内は筆者)

Lynch はまた「通常科学」の共同体の成員が、パラダイムにしたがって科学的手続きを行う様子を、『哲学探究』における数学の規則に関する Wittgenstein の議論を参照しながら、次のように述べる。

いかにして私たちは、ある規則が以前には適用されたことのないような事例にもあてはまるように規則を拡張することを、まったく問題なくやっているのか？その答えは社会学に訴えるものがあるように思われる。ウィトゲンシュタイン（『哲学探究』第206節）は、規則に従うことを命令に従うことに例えている。そして、規則・命令・規則性という概念は、共同の行動の連鎖（nexus）においてのみ場所を占めることができることに注目している。いかにしてこうした秩序だった行為は確立されるのだろうか？例示や指導をとおして、あるいは一致の表現や練習を通して、そして脅迫を通してさえ。「私が恐れているある人が数列を続けるように命令するならば、私は完璧な確実性を持って素早く行為するであろう。そして私は理由の欠如によって悩んだりもしないのである（『哲学探究』第212節）。」

私たちは計算の規則に一致するようにたしかに行為しているのだから、そうする理由は、形式数学にではなく、私たちの「生活形式」に本来備わっているものである（『哲学探究』第214節）。(Lynch 1993,邦訳書：196)

Lynch は、先ほど引用した Latour と Woolgar の研究態度と同様に、「ことをよりはっきりさせるためには、類似した沢山のケースと同様、起こっていることを詳しく観察しなければならない」（『哲学探究』 § 51, Wittgenstein 2009,邦訳書2020:64）という Wittgenstein の主張にしたがって科学的手続きを見るべきだとしているのである。

【参考・引用文献】

- Berger, P. I.& T. Luckmann,1966, *The Social Construction of Reality-A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor. (山口節郎訳, 2003,『現実の社会的構成 知識社会学論考』新曜社.)
- Best, J.,2017, *Social Problems, 3rd ed.*, W.W.Norton & Company. (赤川学監訳, 2020,『社会問題とは何か なぜ、どのように生じ、なくなるのか?』, 筑摩選書)
- Bur, V.,1995, *An Introduction to Social Constructionism*, London: Routledge. (田中一彦訳, 1997,『社会的構築主義への招待——言説分析とは何か』, 川島書店)
- Dewey,J., 1920,*Reconstruction in Philosophy*, New York:Henry Holt. (清水幾太郎・清水禮子訳, 1968,『哲学の改造』, 岩波文庫)

- 藤田真文, 2021, 「ニュース・フレーム論の理論的射程と空間定位 (前編)」, 『社会志林』 68(3), 13-29.
- Gamson, W. A., 1985, "Goffman's Legacy to Political Sociology," *Theory and Society* 14: 605-622.
- Gamson, W. A., 1988, "The 1987 Distinguished Lecture: A Constructionist Approach to Mass Media and Public Opinion," *Symbolic Interaction*, 11, 161-174.
- Gergen, K. J., 1994, *Realities and Relationships: Soundings in Social Construction*, Harvard University Press. (永田素彦・深尾誠訳, 2004, 『社会構成主義の理論と実践 関係性が現実を作る』, ナカニシヤ出版)
- Gergen, K. J., 1999, *An Invitation to Social Construction*, Sage Publications. (東村知子訳, 2004 『あなたへの社会構成主義』, ナカニシヤ出版)
- Goffman, E., 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press.
- 速水奈名子, 2015, 「アーヴィング・ゴフマンの社会学——理論内在的分析と現代的展開」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン やりとりの秩序の社会学』新曜社, 1-25.
- James, W., 1907, *Pragmatism*. (舛田啓三郎訳, 1957, 『プラグマティズム』, 岩波文庫)
- Johnson-Cartee, K. S., 2005, *News Narratives and News Framing: Constructing Political Reality*, Rowman&Littlefield Publishers, Inc.
- Kitsuse, J.I. & M.B. Spector, 1977, *Constructing Social Problems*, Menlo Park, CA: Cumming Publishing. (村上直之, 中河伸俊, 鮎川潤, 森俊太訳, 1990, 『社会問題の構築: ラベリング論を超えて』, マルジュ社)
- Kuhn, T. S., 1962, 1970, *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago: The University of Chicago Press. (中山茂訳, 1971, 『科学革命の構造』みすず書房)
- Latour, B. & S. Woolgar, 1986, *Laboratory Life: The Social Construction of Scientific Facts*, 2nd ed., Princeton University Press. (立石裕二, 森下翔監訳, 2021, 『ボラトリー・ライフ——科学的事実の構築』, ナカニシヤ出版)
- Lynch, M., 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge University Press. (水川喜文・中村和生訳, 2012, 『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房)
- McQuail, D., 1994, *Mass Communication Theory: An Introduction (3rd ed.)*, Thousand Oaks, CA: Sage. (竹内郁郎他訳, 1985, 『マス・コミュニケーションの理論』新曜社.)
- Molotch, H., & M. Lester, 1974, "On the Strategic Use of Routine Events, Accidents, and Scandals," *Sociological Review*, 39(1), 101-12.
- 中河伸俊, 2015, 「フレーム分析はどこまで実用的か」中河伸俊・渡辺克典編『触発するゴフマン やりとりの秩序の社会学』新曜社, 130-47.
- Peirce, C. S., 1905, *What Pragmatism Is*. (「プラグマティズムとは何か」植木豊編訳, 2014, 『プラグマティズム古典集成 パース, ジェイムズ, デューイ』, 作品社, 198-228.)
- Quine, W. V. O., 1960, *Word and Object*, Massachusetts: M.I.T. Press. (大出晁・宮館恵訳, 1984, 『ことばと対象』, 勁草書房)
- Queneau, R., 1947, *Exercices de Style*, Gallimard. (朝比奈弘治訳, 1996, 『文体練習』, 朝日出版社)

- Rorty,R.,1979, *Philosophy and Mirror of Nature*, Princeton University Press. (野家啓一監訳, 1993, 『哲学と自然の鏡』 産業図書)
- Scheufele,D.A.,1999, “Framing as a Theory of Media Effects,” *Journal of Communication*, 49(1),103-122.
- Schutz ,A.,1962,*Collected Papers I: The Problem of Social Reality*,,M.natanson,ed.,The Hague :Martines Nijhoff. (M.ナタンソン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 1983, 『社会的現実の問題 [I] (アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻)』, マルジュ社)
- Schutz ,A.,1962,*Collected Papers I: The Problem of Social Reality*,,M.natanson,ed.,The Hague :Martines Nijhoff. (M.ナタンソン編, 渡部光・那須壽・西原和久訳, 1985, 『社会的現実の問題 [II] (アルフレッド・シュッツ著作集 第2巻)』, マルジュ社)
- Schütz, A.,&T. Luckmann,2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz:UVK Verlagsgesellschaft mbH. (那須壽監訳, 2015, 『生活世界の構造』 ちくま学芸文庫)
- Van Gorp,B.,2007, “The Constructionist Approach to Framing:Bringing Culture Back in,” *Journal of Communication*,57(1),60-78.
- Wei,X.,2020,*Epistemology of News Frame(China Perspectives)*, New York , NY:Routledge.
- Wittgenstein, L.,2003, *Logisch-philosophische Abhandlung*,Bibliothek Suhrkamp. (丘沢静也訳, 2014, 『論理哲学論考』 光文社古典新訳文庫)
- Wittgenstein, L.,2009, *Philosophische Untersuchungen, Revised 4th ed.*,Wiley-Blackwell. (鬼界彰夫訳, 2020, 『哲学探究』 講談社)
- 山口仁, 2018, 『メディアがつくる現実, メディアをめぐる現実 ジャーナリズムと社会問題の構築』 勁草書房.